

ASEAN グローバルプログラム を通して

柴田 夏生
Natsuki SHIBATA
情報メディア学科 2年

1. はじめに

2019年8月27日から9月5日までの計10日間、本学理工学部が主催する「ASEAN グローバルプログラム」と称される海外研修プログラムに参加し、ベトナムとシンガポールの2カ国を訪れた。ベトナムでは、日系製菓会社の現地支社の視察や、現地大学生との英語を介しての菓子のマーケティング戦略を主題としたPBL (Problem Based Learning) 活動などを行い、シンガポールでは南洋理工大学での講義参加・研究室見学や現地企業の見学、日本を含む他の地域とシンガポールを繋ぎ支援を行うマーケティングコンサルタント会社の創業者、現地で活動されている日本人ビジネスパーソン、海外で日本人が起こす企業の資本と経営に携わる仕事を行う実業家の加藤順彦氏による講演や交流会に参加できた。

2. 参加に至った経緯とその目的

元々このプログラムの存在を知らず、友人に誘われて説明会へ参加した。そこでプログラムの詳細を聞き、自身を成長させる良い機会だと感じ、プログラムへの参加を希望した。

参加の目的としては、大きく2つある。1つ目は、英語でのコミュニケーション能力、および与えられた課題を協力して解決する為に協力する力を身に付けることである。海外だけではなく、一部の国内のビジネスシーンでも英語が当然のように使用されている。私は小学生の頃から高校生に至るまで英語を学んできた。しかし私が習ってきた英語はいわば「学問」としての英語であり、実用的な英語とは大きく異なると聞いていた。大学の講義でも英語を学習しているが、海外の学生と実際に課題を解決す

る為のツールとして英語を介しコミュニケーションを行うことで、より自身の英語力を高めることが可能であると考えた。2つ目としては、実際に海外へ赴くことで、現地の情勢や文化、歴史などを肌で感じ、ASEAN地域の将来性や日本との違いを学び、海外に対する意識を高めることを目的とした。

3. ベトナムでの PBL 活動

10日間で様々な活動を行ったが、その中でも特に印象に残り、今後活かすことのできる良い経験になったと感じたのが、ハノイ工業大学の学生と共に行ったPBL活動である。主題がマーケティング戦略ということで、よりビジネスに即した内容であった。具体的なミッションとしては、ベトナムで栄光堂（日本の製菓会社）の既存のキャンディーを爆発的にヒットさせることであった。流れとしては、プロモーションの仮説を日本で考え、現地学生と共に計画を立て、ハノイ工業大学の学生に対しアンケートを行い、英語での合同プレゼンを経て、最終的に本学生のみで栄光堂ベトナムの社長と、メーカーの方にプレゼンテーションを行うというものであった。

3.1 英語でのコミュニケーション

共にPBL活動を行ったハノイ工業大学の学生は外国語学部にも所属しており、英語は非常に堪能であった。それに比べ理工学部生の私たちの英語力は到底彼らに及ばず、同じ言語を用いているのにも関わらず、自己紹介の時点で言葉の壁に打ちのめされてしまった。しかしコミュニケーションを取らないことにはPBLが始まらない為、班のリーダーを任されていた私はジェスチャーや簡単な語彙を用い自ら進んで話すよう心がけた。その甲斐もあってか、アンケートに使う質問の意図や必要性をほぼ伝えることができたと思う。

アンケートを実施する為には、当然ながらアンケート用紙を印刷する必要がある。だが、アンケート中の言語に英語にベトナム語を併記するかどうかに

関して認識の違いが生じ、初版は英語のみとなり、現地でアンケートを作り直すこととなってしまった。単語が理解できず、翻訳サイトを使ったコミュニケーションをせざるを得なかったことが誤認識の原因であると考えた。的確に自らの意志を伝達できないことのもどかしさと、自身の語彙不足を痛感した出来事であった。基本的な単語だけではなく、学術的な専門用語もその都度覚えるようにしたい。

3.2 現地の学生とベトナムのこれから

二日間で計 300 枚のアンケートを回収することができ、戦略の提案を出し合う頃には、他の班員も英語での討論に徐々に慣れ、想像以上にスムーズにことが進み、最終的な意見がまとまった。しかし、英語でのプレゼンの際には、自分たちで考えた書式を提案するも、現地の学生の意見に押し切られてしまい、思うように発表を行うことができなかった。これは後悔していることの一つである。意見を上手に主張できなかった原因は、日本人特有の討論場面での積極性の欠如にあると考えた。PBL では活発に話し合うことが重要である。言葉が正確に理解できなかったことも重なり、受け身姿勢で提案されることに首を縦に振るだけのどうしようもない時間が流れることもあった。協調と同調の違いについて身をもって知らされ、単に意見に賛成するだけではなく自ら意見を出し、他人の意見と比較し討論し合うことの必要性を実感でき、今後数多くの場面で役立つと思われる経験となった。

また、昼食の際に何気ない世間話をする中で、ベトナムの若者の生活を垣間見ることもできた。大学内のベンチでは、ノートやパソコン、関数電卓を駆使して勉学に励む姿が散見され、日本の大学生に比べ、学習意欲の高さを覗くことができた。

所属する学科に関連した観察事項として一つ紹介

したい。ベトナムの若者たちの中で一番有名な SNS は Facebook であり、スマートフォン端末を操作している若者はほぼ Facebook のアプリケーションを利用していた。SNS やインターネットを中心とし、ベトナムでも日本と同様、今後さらに「情報」自体の価値が高まっていくように感じ、ベトナムを含めた ASEAN 地域における情報産業のさらなる成長と発展の可能性を体感した。

4. おわりに

私はこのプログラムを通じて様々なことを学んだ。海外で活動するために必須となる英語の重要性はもちろんのこと、言語が異なる仲間と協力して物事を進める難しさやそれを成し遂げたときの達成感、講演会で教えていただいた海外にあるビジネスの可能性、日本と他の国との考え方の違いなど、挙げればきりが無いが、共通したものとしては、どれも「日本で生活しているだけでは得ることのできない経験であった」ということである。単なる観光を目的とし海外へ行くのではなく、研修を通じて現地の方々とはふれあい、話を聞くことで、日本という国を外から違った視点で捉えることができたと感じ、プログラムへの参加を決めた当初の想像を大きく超えた学びがあった。ここで学んだことを無駄にせず、次に活かすことこそが、研修を終えて普段の生活に戻ろうとしている今、私たちに求められているものだと考える。

将来、海外への留学の有無や、海外と関係する仕事に就くかどうかなどはわからないが、今後の進路や思考に多くの影響と多様性を与える良い経験となったということは自信を持って言える。これからもこのような機会があれば積極的に参加し自身を成長させ、視野と可能性を広げたい。